

Aoyama Sapience

第45号



青山学院大学 文学部 英米文学科同窓会 会報

2021年7月15日発行

■ 巻頭随想 ■

こんな私がLiftoff!

～ロケット打上の初代英語実況放送を担当して～

三宅 麻美

42年前に成績不振で英米文学科行きを諦めフランス文学科に進学した私に、本欄の執筆依頼を頂き、驚愕しました。1996～2016年の間、日本のロケット打上げの初代英語実況放送を担当したことが理由の様です。高等部同級生の小松原宏子さんから熱烈推薦をいただき、悩んだ末、僭越ながら、場違い感満載の私の体験談を書いてみます。

何をやってもダメな私がなぜ英語放送を？ それは運と偶然の賜です。

初等部から自動進学で大学まで卒業。社会人になり、初めて無能ぶりを自覚し、あわてて軌道修正を図り、世界共通語である英語を勉強し始めました。小2から英語のあった青学育ちであったことが後押しになりました。幸運なことに、夫が米国に転勤！ニューヨーク在住の5年間に、NY大学文学修士号(TESOL)とコロンビア大学教育学修士号(比較教育)を取得。帰国後、派遣会社を通し、宇宙開発事業団(NASDA、現在は宇宙航空研究開発機構JAXA)に社内通訳翻訳者として派遣されました。当初の主要業務は、日本の主力ロケットに海外の人工衛星を搭載する作業

の支援。文系門外漢の私に、職員の方々が丁寧にご指導下さいました。

ロケットや人工衛星の作業現場通訳、打合せ通訳などでは、鹿児島県の種子島宇宙センター、米国のNASAなどに出張し、現物を間近で見る機会に恵まれました。ロケットの海外追尾局業務では、キリバス共和国やマーシャル諸島など珍しい場所へのお出張もありました。15年ほど通訳担当した追尾局の年次政府間交渉会議はハワイ開催が多く、スーツ姿でワイキキを闊歩しました。2000年頃からは、JAXAホームページの英訳も担当しました。

ロケット打上実況放送は、不測の事態に即応できるよう、種子島宇宙センターの打上管制室から行います。1996年に初めて「英語放送」の提案があり、別件で種子島に出張予定だった私に白羽の矢が…。日本語訛りの英語なので躊躇しましたが「お試しで」と言われ、初「Liftoff!」の発声をしたのが同年8月。お試しのはずが気づけば20年も続けていました。あがり症で毎回カミカミだったのに…。原稿があっても想定外の事が起きる(打上失敗も二度遭遇)ス



リリングなお仕事！入室制限のある管制室で、緊張感を実感する貴重な経験でした。2014年に放送担当した「はやぶさ2」の打上は注目度も高く、世界のファンが英語を聞いていると思うとさらに緊張が！無事に「衛星分離(Hayabusa2 separation!)」のコールで宇宙へお見送りでき安堵しました。先ごろの無事帰還のニュースには、思わず“Welcome home”の眩しさが出ました。

2016年、そろそろ引退時とJAXAを離れ、現在は英語オンラインレッスン講師をしています。今でも毎日が勉強です。仏語は挫折、それでも、なんとか英語でお仕事ができているのは、青学育ちだったからかもしれません。

最後に、この寄稿の機会を下さいました編集委員長の岡田美智子様、同級生のヒロに、深謝いたします。

(英語オンラインレッスン講師 '83年仏文科卒)

シェイクスピアから愛の花束を(7)

“For women are as roses, whose fair flow'r / Being once display'd, doth fall that very hour.”(大意:女はバラの花、その美しい花はひとたび咲き誇ったと思う間もなく、散ってしまう。)

シェイクスピアの喜劇『十二夜』で、オーシーノー公爵が小姓に語る言葉です。じつはこの小姓、ヒロインのヴァイオラが変装した登場人物。彼女は男に扮して公爵に仕え、彼に思いを寄せますが、当の公爵はある令嬢との結婚を望んで

います。このせりふで公爵は、どんなに美しい女性であっても、時の流れには逆らえないと自説を述べます。時間は残酷な破壊者として意識されているようです。

この言葉を聞いたヴァイオラは、自分の恋心を内に秘めて、“And so they are: alas, that they are so! / To die, even when they to perfection grow!”(そう、それが女、悲しいことに女です！今を盛りと花開くときに、散ってしまうのです!)と話を合わせます。美しさ、若さ、いや人の命それ自体がはかないものという詠

嘆の調べは、エリザベス朝の恋愛詩に良く見られるテーマです。切なさという点では右に出るものがない名場面です。

しかし、公爵の言い分とは裏腹に、この芝居を通じて私たちが目撃するのは、ヴァイオラの公爵へ捧げる愛の一途さです。喜劇はもつれた展開の後、真実の愛に気づいた公爵とヴァイオラが結ばれるという幕切れを迎えます。この世には永遠に散ることのないバラの花が存在するのではないか——『十二夜』は不思議な感動とともに、私たちにそう語りかけているように思います。

佐久間 康夫 比較芸術学科教授 ('82年院修了)